

---

# Over Sky

桐生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Over Sky

### 【コード】

N9775Y

### 【作者名】

桐生

### 【あらすじ】

ただ平凡な日々がどれだけ大切なのか、それは失ってから気付くのだらう。

## プロローグ1 起床（前書き）

この物語はフィクションであり、  
実在の人物及び団体とは一切関係  
ありません。

## プロローグ1 起床

最近よく同じ夢を見る。

勇者と呼ばれ、仲間と共に世界を救っている夢を。

聖剣を振るい、人を救い、魔物を斬り、魔王を討ち、幸福な未来を掴み取った夢を。

これは夢だ。絶対に夢だ。夢だっけっていったら夢だ。

というかなんだよこれ、こんな王道ストーリーのRPGなんて今じゃ確実に売れねえだろうが。

最近のRPGはもつとシナリオ凝らないと誰も見てくれねえだろうが。

何だよ聖剣って、確実に銃刀法違反じゃねえか、デザインダサイいし。これ聖剣(笑)だろ。

というかなんでこんな夢見てんだ俺。ここ最近ダチと一緒にMMORPGばっかやってたからか。睡眠時間が一日の十二分の一位になるまでやり込んでいるからか。

けど面白えんだよあれ。レベルがないからプレイヤーの腕がモ口に出るのが良いんだよなあ。チートとか汚ねえこと出来ないようになってるのがもうね。

ホントありがとございます。だからとかいって有料コンテンツとかはしないけど。

「兄さん起きてください」

さて、そろそろ腹の上から感じる重さについて考えるとしようか。およそ50kg程度だと推定。

「失礼ですね兄さん、45kgですよ」

「いや、大差なくね？ あと心を読むな」

「失礼な、乙女の体重は年齢と同様に禁忌ですよ。聞いたからには兄さんには死んでもらいます」

「何で!？」

「社会的に」

「俺に人類の三大タブーの一角を犯せと!？」

「いやです兄さん……『犯す』なんて……優しくしてください」

「しねえよ!？ ってやめろ!！ 俺の耳元で『欲望に忠実になつたほうがいいですよ』とか囁くんじゃねえ!！」

なんて危険なことを言いやがる。確かに妹は美少女と呼べる部類だが、手を出すほど性欲を持って余した覚えはない。

まだ大人の階段を一段も登っていないが。

ああ、彼女欲し……くはないな、なんか嫌な予感がする。きちんと責任をとれる年齢になったらでいいや。

「……というか何で部屋にいるんだよ、きちんと鍵は閉めたはずなんだが」

「何を言ってるんですか、私の兄さんへの愛憎入り交じったこの気持ちを鍵ごときが遮れるわけないでしょう。破壊しました」

「するな!！ って憎!？ 憎まれてんの俺!？」

何てこった。知らない内に妹に憎まれていたとは。心当たりが全くないんだが。

「ええ、いつまで経っても兄さんが一線を越えてくれませんので。

可愛さ余って憎さ百倍とはこういつた場面で使用するのでしょうか」

「逆怨みも甚だしい!！」

「なら抱いてください」

「却下だ!！ どうかどいてくれ、起きられん」

「ココがですか？」

「違うわ!！ 女の子がそういうことを言っくんじゃありません!！」

ふざけるな。朝から実妹とエロゲ的なシチュエーションなんて御免被る。んなもん二次元のあり得ない妄想だけで十分だ。

「そつですか」

唇を尖らせ、つまらなそうな表情で呟きながら、妹はベッドの上

から降りて俺の部屋の窓辺まで歩きカーテンを開いた。

窓から穏やかな光が射し込み、暗かった部屋を明るく照らす。

妹は若干の愁いを帯びた瞳で朝日を顔に浴びて窓の外を眺めているその横顔を、俺はまじまじと見る。

シャギーを入れ、ベリーショートに整えた清楚な黒髪、憂いを秘めた漆黒色の瞳と、その瞳を際立たせる陶器のように白い肌。

更には均整の取れたプロポーションと、少なくとも外見だけを見るならば、どこかの美術館にでも飾っておきたくなるような美少女それが俺の妹、光永 春花だ。

春花はスツと、その細い指で窓に手をかけ鍵を開ける。

そして窓に手を掛け開け放ったその瞬間。

妹が急に身を屈めた。

一瞬、妹の行動に疑問符が浮かぶ。だがそれは一瞬。ほんの一瞬だ。何故ならその直後。

俺の目の前を黒い何かが見認可能速度ギリギリの高速で飛来したからだ。

窓と反対側の壁から激突音というか何かが潰れたような音がしたので俺はそちらに目を向ける。

「……カプトムシ？」

何故かカプトムシが俺の部屋の壁にとまっていた。なんかすげえ堂々としている。存在感がすげえ。カプトムシさんマジばねえっす。

「朝から大したご挨拶ですね、虫女」

「ちっ、当たれよ。っーかビビらねえのかよ。相変わらずつまんねえ奴だな、花女」

そして窓の向こうから声がした。聞こえてきたのは若干幼さが残る少女の声。俺は頭を二、三度掻いた後、妹のいる窓際までパジャマのまま歩いていく。

「……何してんだ秋葉？」

「あ？ いや、あのな、こう、あれだ、ちょうど窓を開けたらその女がいたから、ちよっとな」

「ちょっとでカブトムシが飛来するのか、絶対おかしいだろ」 向かいの家の窓から幼なじみがオレンジ色のパジャマ姿でそこにいた。若干オレンジがかった髪は寝起きらしくボサボサ、眼も寝惚け眼だがそこに下品な感じがあまりしないのは俺と同じ年だが幾分か幼さの残る端正な顔立ち故か。

「兄さん、支度をしてください。朝食の準備がそろそろ終わる時間です」

「ん？ああ、わかった。んじゃ秋葉、後でな」

いつの間にか俺の背後に移動していた妹から声がかけられたので向かいの秋葉にヒラヒラと手を降る。秋葉はおう、と返事を返し、目を擦りながら振り返って歩いて行った。

何故かさつきまで俺の部屋にいたカブトムシもそれに合わせて秋葉の部屋に飛んでいったのだが。

「……何でカブトムシ？」

俺は先程の光景に頭を捻りながら部屋を後にした。

俺の家はごくごく平凡な二階建ての一軒家。家族も妹が一人に両親と典型的な核家族。

近くにある、偏差値はまあ若干高め？の高校に今年から通っている。

ダチは幼稚園からずっとつるんでるやつとか、小中学校で仲良くなったやつとか、高校で仲良くなったやつとか、結構多めの方。ちなみに秋葉は幼稚園からずっとつるんでるやつの人。

部活には入ってない。

最近ハマってるのが、どっかの大手のゲームメーカーが今年の元旦に販売したヘッドギアで脳の電気信号だか何だかを读取取ってキヤラが思うままに動くという面白装置を使ったMMORPGだ。

名前を「エヴァ」

どっかの人造人間みてえな名前だが特に関係はない。ダチと一緒にやり込んでる。最近じゃやり込みすぎたせいで大体のトップラン

カーと顔見知りになっている。

かく言う俺もトップランカーの一人なのだが。伊達に昔から体力バカと呼ばれてねえ。これがきつかけで仲良くなったやつもいる。

ちなみにこれ遊ぶ以外にも色々と出来て便利だ。たまに皆で集まって勉強会的なこともしてたりする。おかげでテストの成績も悪くない。

ホントにエヴァ様々だ。

といっても、それだけじゃ体が鈍るのでリアルでもきちんとして運動はしている。

親父ともたまに拳で語り合ったりしているが。つか理由の大半が妹の度を越えたブラコンに関してなのは止めてくんねえかな、俺のせいじゃなくね。

そして母さんも親父を見て「かつこいいわあ」なんて言ってねえで止めてくれ。その内どつちかが死ぬ気がする。

と、まあこんな感じ。これが俺。今を全力で楽しんでる、

最近見る夢みたいに、ファンタジー要素なんて皆無の、ダチと肩を組んで、バカみたいな会話をして、バカみたいに笑っている、これが俺の日常。

これがホントはどれだけ尊いものだったのか、それを知ったのは少し後のことになる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9775y/>

---

Over Sky

2011年11月30日00時53分発行